

## 評判操作の発達 —比較症候群アプローチによる検討—

専修大学 池田 彩夏  
自治医科大学・日本学術振興会\*1 白野 陽子  
白鷗大学 浅田 晃佑  
自治医科大学 池田 尚広  
自治医科大学 山形 崇倫  
自治医科大学\*2 平井 真洋

### Examination of development of reputation management by cross-syndrome approach

Senshu University, IKEDA, Ayaka  
Jichi Medical University & Japan Society for Promotion of Science, HAKUNO, Yoko  
Hakuoh University, ASADA, Kosuke  
Jichi Medical University, IKEDA, Takahiro  
Jichi Medical University, YAMAGATA, Takanori  
Jichi Medical University, HIRAI, Masahiro

### 要 約

社会的コミュニケーションや社会性に困難が伴う自閉スペクトラム症児，希少遺伝性疾患であり過度の社会性を有するとされるウィリアムズ症候群児ならびに定型発達児を対象に，評判操作の有無を比較検討した。これにより，評判操作の獲得メカニズムを明らかにすることを目的とした。実験では，自己に関する直接的な評判操作と間接的な評判操作の有無を検討する課題を行った。その結果，定型発達児では自己に関するネガティブな評判を避けるための直接的な評判操作が見られるものの，自閉スペクトラム症児及びウィリアムズ症候群児では見られなかった。また，間接的な評判操作に関しては，ウィリアムズ症候群児において，評判操作をする傾向が見られた。これらの結果より，直接的な評判操作に関しては心の理論の発達が，間接的な評判操作に関しては社会的動機づけが寄与していることが示唆される。結果の非対称性について，評判操作の構造の違いから考察した。

**【キー・ワード】 評判操作, お世辞, 自閉スペクトラム症, ウィリアムズ症候群**

\*1 現所属：中央大学・日本学術振興会

\*2 現所属：名古屋大学

## Abstract

This study aims to clarify the developmental mechanism of reputation management by comparing the development of reputation management in children. Specifically, we examined reputation management in typically developing children and in children with autism spectrum disorders, who have difficulty in social communication and sociality, and children with Williams syndrome, who have excessive sociality. In the experiment, we conducted a task to examine whether children manage their self-reputation directly or indirectly. Results showed that direct reputation management was not observed in children with autism spectrum disorders or Williams syndrome, while it was observed in typically developing children. In addition, children with Williams syndrome were more likely to manage their reputation indirectly. These results suggest that the development of theory of mind may contribute to direct reputation management, while social motivation may contribute to indirect reputation management. The asymmetry of the results is discussed based on the differences in the structure of the two types of reputation management.

**【Key words】 reputation management, flattery behavior, autism spectrum disorders, Williams syndrome**

## 問題と目的

私たちは日々の生活において、他者から査定を受けること、そして他者を査定することは、避けては通れない。他者から与えられた、ある人ないし対象の特性や属性についての査定とは、すなわち評判である。私たちは、他者との関係性を維持し、向上させるため、自分自身の評判を気に掛けるだけでなく、自己呈示や印象操作を用いて、自分についての他者の評価を戦略的に操作しようとする。これは評判操作 (*reputation management*) と呼ばれ、その方法は 2 種類あるとされる。1 つは直接的に自分の評判を高める方法であり、自分のポジティブな評判が広まり、ネガティブな評判が広まらないようにするために自分自身の行動を調節する行動である。もう 1 つは、他者の評判を高めることで間接的に自己の評判操作をする方法であり、例えばお世辞を言う、もしくは自分のことを卑下することなどの行動である。

では、評判操作はいつ頃、どのようなメカニズムで発現するのだろうか。評判操作の発達メカニズムの解明にあたって、現在、2 つの方向性からの検討がなされている。1 つは、定型発達児を対象に、評判操作の発現時期や評判操作が行われる状況を明らかにするものである。先行研究によると、定型発達児では評判への関心は 5 歳ごろに獲得されることが示されている他 (Engelmann, Herrmann, & Tomasello, 2012; Fujii, Takagishi, Koizumi, & Okada, 2015; 奥村・池田・小林・松田・板倉, 2016), 自分と同じ集団に属する他者に対しては、異なる集団に属する他者に対してよりも評判操作を行いやすいことがわかっている (Engelmann, Over, Herrmann, & Tomasello, 2013)。もう 1 つは、非定型

発達者と定型発達者との比較であり、社会的コミュニケーションに困難を抱えるとされる自閉スペクトラム症 (ASD) 者では、評判操作が見られないことが報告されている (Izuma, Matsumoto, Camerer, & Adolphs, 2011; Chevallier, Molesworth, & Happe, 2012)。評判操作の発現時期が、他者の心的状態の表象能力である心の理論の獲得時期 (4-5 歳) と一致することに加え、心の理論に関する理解が乏しい ASD 者で評判操作が見られないことから、評判操作の発現には、心の理論の獲得が影響している可能性が指摘されている。しかしながら、心の理論をもたない魚も評判操作を行うことから (Tennie, Frith, & Frith, 2012)、心の理論は評判操作には影響しない可能性も指摘されている。評判操作に心の理論が必要ないとする立場からは、評判操作の発現には心の理論ではなく、社会的な動機づけが重要であるという考えが提唱されている (Chevallier, et al., 2012)。社会的動機づけとは、社会的な刺激を好み、社会的なやり取りを楽しみ、そして、社会的な結びつきを維持するような心の性質のことである (Chevallier, Kohls, Troiani, Brodtkin, & Schultz, 2012)。しかしながら現在まで、評判操作がどのような発達メカニズムで発現し、発達するかに関しては、明確な答えが出ていない。

そこで、本研究では、評判操作の発現及びその発達に与える、他者の心的状態の理解と社会的動機づけの影響を検討することを目的とする。この問いを明らかにするために、複数の非定型発達児を対象とする「比較症候群アプローチ (*Cross-syndrome approach*)」を用いる (Karmiloff-Smith et al., 2012)。近年、社会的認知発達の研究では、希少遺伝性疾患であり過度の社会性を有するウィリアムス症候群 (WS) 児と社会的コミュニケーションに困難を有するとされる ASD 児を比較するアプローチが注目されている。ASD 者が人の顔をあまり見ない一方で、WS 者は定型発達者以上に人の顔に注目するなど (Riby, & Hancock, 2008)、彼らが示す社会性が対極にある一方で、ASD 児と WS 児はともに他者の心的状況の理解が不得手であることが報告されている (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Tager-Flusberg & Sullivan, 2000)。したがって、ASD 児と WS 児を対象にすることにより、評判操作の発現に必要な要因を切り分けることが可能となる。すなわち、ASD 児及び WS 児がともに評判操作を行わないならば、評判操作の発現には、他者の心的状況の理解が重要だと考えられる。一方、ASD 児は評判操作を行わないが、WS 児では評判操作を行うのであれば、評判操作の発現には社会的動機づけが重要であると推測できる。本研究では、自己に関する直接的な評判操作と間接的な評判操作の 2 種類の評判操作を同時に扱うことにより、評判操作の発達メカニズムの包括的な解明を試みる。なお、定型発達児において、直接的な評判操作と間接的な評判操作の両方が安定して見られる年齢が 6 歳以降であることを踏まえ、ASD 児・WS 児・年齢マッチの定型発達児 (TD 児) は 6 歳以上を検討対象とした。

## 方 法

**倫理的配慮** 本研究の実施にあたり、所属機関 (専修大学) 及び調査実施機関 (自治医科大学・専修大学) の倫理委員会の承認を受けた。また、調査の実施に先立ち、保護者に調査の内容を説明し、書面にて同意を得られた幼児を対象に課題を実施した。

**手続き** : 参加児と十分にラポールを取ったのち、課題 1、課題 2 の順で課題を実施した。また、PVT

R (上野・名越・小貫, 2008) を実施し、語彙得点の計測を行った。6 歳以上の参加児の保護者には、AQ 日本語版 (児童用) に回答していただいた。

### 課題 1 : 直接的な評判操作の検討

参加児 ASD 児 27 名 (レンジ : 6-13 歳, N<sub>女児</sub>=2), WS 児 24 名 (レンジ : 6-16 歳, N<sub>女児</sub>=17) が参加した。また、年齢マッチ TD 児は 27 名 (レンジ : 6-13 歳, N<sub>女児</sub>=11), WS 児との語彙得点マッチ TD 児は 61 名 (レンジ : 3-13 歳, N<sub>女児</sub>=27) であった。なお、語彙得点マッチ TD 群のうち 8 名は、Zoom を用いた web 実験でデータ収集を行った。他に 22 名が参加したが、シールに魅力を感じなかった (N<sub>TD</sub> = 13, N<sub>ASD</sub> = 4, N<sub>Nws</sub> = 1), 教示を理解しなかった (N<sub>TD</sub> = 3, N<sub>Nws</sub> = 1), テクニカルエラー (N<sub>TD</sub> = 4) を理由に分析から除外した。参加児の平均年齢・語彙得点・AQ スコアの内訳を表 1 に示す。群ごとに年齢のばらつきがないことを確認するために、3 (群 : ASD 児群・WS 児群・TD 生活年齢マッチ群) × 2 (条件 : 観察者あり・観察者なし) の分散分析を行ったところ、有意な主効果及び交互作用は見られなかった。また、語彙得点に関して、2 (群 : ASD 児群・TD 生活年齢マッチ群) × 2 (条件 : 観察者あり・観察者なし) 及び 2 (群 : WS 児群・TD 語彙得点マッチ群) × 2 (条件 : 観察者あり・観察者なし) の分散分析を行ったところ、有意な主効果及び交互作用は見られなかった。

表 1 課題 1 の参加者の生活年齢・語彙得点・AQ スコア

	条件	N	生活年齢	語彙得点	AQ スコア
ASD 児	観察者あり	14	9.69 (2.47)	51 (23.1)※	27.2 (8.97)
	観察者なし	13	9.00 (2.45)	56.7 (16.7)	26.6 (8.24)
WS 児	観察者あり	13	8.92 (2.78)	23.9 (21.7)	18.0 (6.24)
	観察者なし	11	10.36 (2.54)	40.8 (20.1) ※	23.1 (4.50) ※
TD 児 (生活年齢 マッチ群)	観察者あり	13	8.38 (2.18)	55.7 (15.3)	14.3 (7.77)
	観察者なし	14	8.21 (2.15)	49.3 (15.7)	12.9 (6.07)
TD 児 (語彙得点 マッチ群)	観察者あり	31	5.84 (2.68)	31.4 (23.9)	
	観察者なし	30	6.13 (2.52)	34.8 (19.8)	

( ) 内の数字は標準偏差を示す。※1 名ずつデータ未取得者が含まれる。AQ 日本語版 (児童用) は 6 歳以上を対象とした質問紙であるため、TD 児 (語彙得点マッチ群) では未算出である。

**課題の手続き** 奥村ら (2016) のシール分配課題を用いて検討した。実験者は、参加児に 10 枚のシールを提示しながら、それらが他の子供に渡す予定のシールであること、他の子供にシールを渡すために、参加児にはシールを封筒に入れる作業を手伝ってもらいたいことを説明した。続けて、シールは全て他の子供のものであるが、もし参加児が欲しければ、参加児の名前が書いてある封筒にシールを入れれば、参加児のものになると教示した。参加児が教示を理解したら、シールを封筒に入れる

よう促した。課題では、観察者あり条件と観察者なし条件の2条件を設定し、参加児はどちらか一方の条件に振り分けられた。観察者あり条件では、実験者が参加者の隣で、参加児がシールを分配する様子を観察した。観察者なし条件では、対面実験では実験者は退室し、参加児は誰からも観察されていない状態でシールの分配を行った。web実験では、実験者は後ろを向き、参加児から目をそらしたことに加え、保護者にも参加児の分配を見ないように指示をした。

**分析** 参加児が自分のものとしたシールの枚数を求め、条件間・群間での比較を行った。評判操作を行うのであれば、観察者あり条件よりも、観察者なし条件において、自分のものとするシールの枚数が多くなると予測される。

## 課題2：間接的な評判操作の検討

**参加児** ASD児28名（レンジ：6-14歳， $N_{\text{女児}}=1$ ），WS児17名（レンジ：6-16歳， $N_{\text{女児}}=12$ ）が参加した。また、年齢マッチのTD児は36名（レンジ：6-13歳， $N_{\text{女児}}=14$ ），WS児との語彙得点マッチのTD児は60名（3-13歳， $N_{\text{女児}}=25$ ）であった。他に11名が参加したが、統制条件のイラストについて、1回目と2回目で異なるイラストを選んだ（ $N_{\text{TD}}=3$ ， $N_{\text{WS}}=2$ ），課題を完遂しなかった（ $N_{\text{TD}}=2$ ），テクニカルエラー（ $N_{\text{TD}}=3$ ， $N_{\text{ASD}}=1$ ）を理由に分析から除外した。

参加児の年齢・語彙得点・AQスコアの内訳を表2に示した。群ごとに年齢のばらつきがないことを確認するために、ASD児群・WS児群・TD生活年齢マッチ群を対象に一要因の分散分析を行ったところ、有意な主効果は見られなかった。また、語彙得点に関し、ASD児群とTD生活年齢マッチ群、WS児群とTD語彙得点マッチ群を対象に一要因の分散分析を行ったところ、有意な主効果は見られなかった。

表2 課題2参加者の生活年齢・語彙得点・AQスコア

	N	生活年齢	語彙得点	AQスコア
ASD児	28	9.50 (2.35)	56.64 (19.64)	27.1 (8.52)
WS児	17	9.82 (3.30)	37.24 (21.13)	20.8 (6.02)
TD児（生活年齢マッチ群）	36	8.67 (2.35)	53.34 (16.67)	14.4 (5.83)
TD児（語彙得点マッチ群）	60	6.73 (3.06)	38.18 (23.62)	

( )内の数字は標準偏差を示す。AQ日本語版（児童用）は6歳以上を対象とした質問紙であるため、TD児（語彙得点マッチ群）では未算出である。

**課題の手続き** Fu & Lee (2007) で用いられた、イラスト評価パラダイムを改良し、他者の評判を高める行動が見られるかを検討した。参加児は、2枚1組のイラストを2組提示され、イラストの評価を求められた。イラストのうち、1組は統制条件、もう1組は実験条件として使用された。なお、調査には、2名の7歳女児に描いてもらった人と車のイラストを用いた。イラストの巧拙に関して、大学生11名（男性4名、平均年齢20.7歳）に7件法（1：非常に下手～7：非常に上手）で評価してもらったところ、人のイラストに関してはその評価に有意な差は見られなかったが（ $t(10) = 0.61$ 、

$p=0.55$ ), 車のイラストに関しては有意な差が見られた ( $t(10)=-3.36, p=0.01$ )。車のイラストの評価は, 統計的に有意な差があったものの, その評価の平均得点は 5.2 と 6.5 と差は小さく, ともに比較的上手な絵と評価されていることからそのまま用いることとした。実験ではまず, 実験者 A が, 2 組のイラストを 1 組ずつ参加児に提示し, それぞれ, どちらのイラストが上手だと思うかを参加児に尋ねた。次に実験者 A は「忘れ物をした」と言って退室し, 入れ替わりで実験者 B が実験室に入室した。実験者 B は, 参加児に何をしていたかを尋ねた後, 参加児が上手だと思うイラストを尋ねた。この際, 統制条件のイラストについては, どちらが上手かを聞くだけであるが, 実験条件のイラストに関しては, 参加児が「上手な絵」として選択しなかったイラストを指差し, 実験者 B が描いた絵であることを告げた後に, どちらのイラストが上手だと思うかを尋ねた。統制条件あるいは実験条件とするイラストのペア及び, イラスト提示の左右の位置は参加者間でカウンターバランスを取った。自己に関する間接的な評判操作を行うのであれば, 実験条件のイラストに関して, 実験者 B に質問された時には参加児が「上手な絵」として選択しなかったイラストを上手な絵として選択すると考えられた。

## 結 果

統計的な分析は R (3.5.3; R Core Team, 2019) を用いて実施した。

### 課題 1 : 直接的な評判操作の検討

自分のものとしたシールの平均枚数は, ASD 児の観察者あり群で 3.76 枚 ( $SD=3.21$ ), 観察者なし群で 4.77 枚 ( $SD=3.30$ ), WS 児の観察者あり群で 6.15 枚 ( $SD=3.24$ ), 観察者なし群で 4.36 枚 ( $SD=2.25$ ), 生活年齢マッチ TD 群の観察者あり群で 2.69 枚 ( $SD=2.50$ ), 観察者なし群で 4.76 枚 ( $SD=3.07$ ), 語彙得点マッチ TD 群の観察者あり枚で 4.81 点 ( $SD=3.15$ ), 観察者なし群で 5.1 枚 ( $SD=2.82$ ) であった (図 1)。

自分のものにしたシールの枚数を従属変数とし, 群 (ASD 児群・WS 児群・生活年齢マッチ TD 群) と条件 (観察者あり・観察者なし) を固定効果とした GLM (binomial, logit) を行った (表 3)。尤度比検定の結果, 群の主効果 ( $\chi^2(2)=13.40, p=0.001$ ), 及び, 群と条件の交互作用が有意だった ( $\chi^2(2)=20.95, p<0.001$ )。そこで, 群ごと・条件ごとのサブグループに分け, それぞれの効果の検討を行った。まず, ASD 群を対象に, 条件 (観察者あり・観察者なし) を固定効果とした GLM (binomial, logit) を行ったところ, 条件の有意な主効果は見られなかった ( $\chi^2(1)=2.67, p=0.10$ )。WS 群を対象に同様の分析を行ったところ, 条件の有意な主効果が見られ, 観察者なし条件に比べて観察者あり条件において自分のものとしたシールの枚数が多かった ( $\chi^2(1)=7.71, p=0.01$ )。生活年齢マッチ TD 群を対象に同様の分析を行ったところ, 条件の主効果が有意であり, 観察者あり条件に比べて観察者なし条件で自分のものとしたシールの枚数が多かった ( $\chi^2(1)=12.73, p<0.001$ )。次に, 観察者あり条件を対象に, 群 (ASD 児群・WS 児群・生活年齢マッチ TD 群) を固定効果とした GLM (binomial, logit) を行ったところ, 群の有意な主効果が見られた ( $\chi^2(2)=33.81, p<0.001$ )。多重比較をしたところ, WS 児は ASD 児と年齢マッチ TD 児に比べて, 自分のものとしたシールの枚数が多かった ( $p$ s

<0.001)。観察者なし条件を対象に、同様の分析を行ったところ、群の有意な主効果は見られなかった ( $\chi^2(2)=0.54, p=0.76$ )。

さらに、自分のものにしたシールの枚数を従属変数とし、群 (WS 児群・語彙得点マッチ TD 群) と条件 (観察者あり・観察者なし) を固定効果とした GLM (binomial, logit) を行った (表 3)。尤度比検定の結果、群と条件の交互作用が有意だった ( $\chi^2(2)=7.51, p=0.01$ )。そこで、群ごとのサブグループに分けて検討を行ったところ、語彙得点マッチ TD 群では条件の有意な主効果は見られなかったが ( $\chi^2(1)=0.53, p=0.47$ )、観察者あり条件では群の有意な主効果が見られ ( $\chi^2(1)=6.71, p<0.001$ )、WS 児は語彙得点マッチ TD 児に比べて、自分のものとしたシールの枚数が多かった。

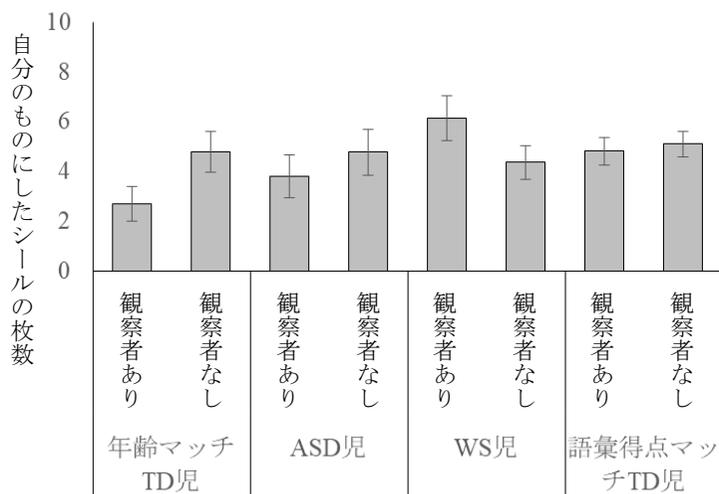


図 1 条件・症例ごとのシール分配枚数

表 3 GLM で得られた推定値

	推定値	標準誤差	95%信頼区間	
			下限	上限
<b>3 群 (ASD 群・WS 群・年齢マッチ TD 群) モデル</b>				
切片	-0.86	0.17	-0.42	0.25
群 (ASD)	0.01	0.24	-0.49	0.47
群 (WS)	-0.17	0.26	-0.67	0.33
条件 (観察者なし)	-0.91	0.26	-1.43	-0.41
ASD 群×条件 (観察者なし)	0.51	0.36	-0.19	1.22
WS 群×条件 (観察者なし)	1.34	0.37	0.92	2.37
<b>2 群 (WS 群・語彙得点マッチ TD 群) モデル</b>				
切片	0.04	0.12	-0.19	0.27
群 (WS)	-0.3	0.22	-0.74	0.14
条件 (観察者なし)	-0.12	0.16	-0.44	0.2
WS 群×条件 (観察者なし)	0.84	0.31	0.24	1.45

## 課題 2 : 間接的な評判操作の検討

実験条件のイラストに関して、実験者 A に質問された時に「上手な絵」として選択しなかったイラストを、実験者 B に質問された時に「上手な絵」として選択した参加児は、ASD 児で 8/28 名、WS 児で 8/17 名、生活年齢マッチ TD 群で 9/36 名、語彙得点マッチ TD 群で 16/60 名であった。各群に対し、二項検定を行ったところ、ASD 群・生活年齢マッチ TD 群・語彙得点マッチ TD 群ではお世辞を言わなかった人数が有意に多かったが (ASD:  $p = .04$ ; 生活年齢マッチ TD:  $p < .001$ ; 語彙得点マッチ TD:  $p < .001$ )、WS 児ではお世辞を言った人数と言わなかった人数に統計的に有意な差は見られなかった ( $p = .99$ )。また、グループ間でお世辞産出頻度に違いがあるかを検討するために、ASD 群・WS 群・生活年齢マッチ TD 群を対象にカイ二乗検定を行ったところ、有意な違いは見られなかった ( $\chi^2(2) = 2.74, ns$ )。さらに、WS 群と語彙得点マッチ TD 群を対象にカイ二乗検定を行ったところ、有意な違いは見られなかった ( $\chi^2(1) = 1.71, ns$ )。

## 考 察

本研究は、ASD 児・WS 児・TD 児を対象に、自己に関する直接的な評判操作と間接的な評判操作の 2 種類の評判操作を同時に扱うことにより、評判操作の発達メカニズムを包括的に明らかにすることを目的とした。直接的な評判操作に関しては、シールの分配課題による検討を行ったが、定型発達児では評判操作が見られた一方で、ASD 児では評判操作は見られず、WS 児では観察者の有無で分配枚数が異なるものの、予想とは異なる結果が見られた。一方、間接的な評判操作に関しては、イラスト

トの評価課題を用いたが、TD 児と ASD 児に比べて、WS 児ではお世辞を示す行動が多く見られたものの、統計的に群間の有意な差は見られないという結果だった。

直接的な評判操作の有無について検討したシールの分配課題において、ASD 児では、観察者あり条件となし条件で差が見られなかったが、WS 児では観察者の有無で分配枚数が異なった。しかしながら、WS 児において見られた行動調整は TD 児とは異なるものであった。TD 児における評判操作では、観察者がいるときに比べて、観察者がいないときに自分のものとしたシールの枚数が多くなったのに対し、WS 児では逆に、観察者がいない時に比べて観察者がいるときに自分のものとするシールの枚数が多くなっていた。TD 児における評判操作の動機は、罰の回避であると主張されており (Fujii, et al., 2015)、その目的はネガティブな評判を持たれることを避けることであるが、逆の行動調整が見られた WS 児ではネガティブな評判の回避が行動調整の動機づけにはなっていないと考えられ、TD 同様の評判操作は行われていないと言える。また、語彙得点マッチ TD 群とも異なる傾向を示していることを踏まえると、WS 児で見られた行動調整は、知能や語彙力に起因するものではなく、彼らの特性である過度な社会性によって引き起こされた可能性が高い。本研究では、WS 児の特徴的な行動調整を引き起こす要因を検討することはできていないが、1つの可能性として、WS 児は人と関わりたいという欲求が高いため、他者が自分をどのように評価するかではなく、目の前の調査者とのやりとりを期待して、行動の調整を行っていたことが考えられる。Asada, Tomiwa, Okada, & Itakura (2010) は、パズルの完成などを求める達成課題を WS 児と TD 児に実施した際、WS 児は実験者に見られていない時よりも見られているときに実験者への課題達成児の話しかけの量が多くなるという、TD 児とは逆のパターンを示したことを報告している。したがって、見られているという状況が、WS 児の他者とやりとりをするという動機づけを高めている可能性がある。しかしながら、TD 児同様のネガティブな評判が立つことを回避するための評判操作が見られなかったという点において、ASD 児と WS 児は共通している。このことを踏まえると、自己の直接的な評判操作に関しては心の理論の獲得が重要であることが示唆される。心の理論課題の通過に困難を示す WS 児と ASD 児にとっては、他者が自分のことをどのように評価し、その結果、他者が自分に対してどのような行動に出るかについて想像することが難しかったため、他者からネガティブな判断をされないように利己的な振る舞いを避けるという行為が見られなかったと考えられる。

一方、間接的な評判操作の有無を検討したイラストの評価課題では、お世辞の産出に群間の有意な差は見られなかったものの、WS 児が他の 2 群に比べてお世辞の産出が見られやすかったことは特筆すべき点である。この結果を踏まえると、間接的な評判操作の発現には心の理論ではなく社会的動機づけが重要である可能性が考えられる。本研究からは、WS 児が行う操作の特殊さが何に起因するものかは明白ではないが、WS 者の特性の 1 つである過度な社会性、特に他者への強い共感を示すことが影響しているかもしれない。1つの可能性として、WS 児においては目の前にいる他者を傷つけないようにしたい、あるいは他者に喜んでもらいたいという動機が強く作用したのかもしれない。また、ASD 児と TD 児において、お世辞産出に大きな差が見られなかったことは、課題への回答方法が影響していることが考えられる。先行研究では、イラストの評価は二択ではなく、リッカートスケールを用いそれぞれのイラストに対して 7 件法でその良し悪しの評価を求めている。今回、WS 児が一般

に数の理解を苦手としていることを踏まえ (Paterson, Girelli, Butterworth, & Karmiloff - Smith, 2006), より簡便な手法での回答を求めた結果, TD 児と ASD 児の差を見出すことができなかった可能性がある。成人を対象として, リッカートスケールによるイラスト評価を課した実験では, ASD 者よりも TD 者においてイラスト作成者を前にしたときの評価の変動が大きく, お世辞的な行動を示すことが報告されている (Chevallier, et al., 2012)。したがって, ASD 児と TD 児の間接的な評判操作の比較に関しては, 引き続き検討が必要である。

本研究では, 自己に関する直接的な評判操作と間接的な評判操作の両方を扱った。直接的な評判操作に関しては, ASD 児・WS 児において, TD 児で見られるような評判操作が見られなかったことから, 直接的な評判操作の発達には心の理論の獲得が重要である可能性が考えられる。一方, 間接的な評判操作に関しては, WS 児は TD 児・ASD 児よりも過度な操作をする傾向にあり, 社会的動機づけの影響が強いことが示唆された。この違いが何に起因するのかを考えたい。自己についての直接的な評判操作は, 他者が自分をどのような評価をするかを想像する必要があり, その運用には心の理論の中でも特に, 誤信念の理解のような他者の心的状態の認知的な理解が必要であると考えられる。その一方で, 間接的な評判操作に関しては, 他者が自分に対してどのような印象を持つかを認知的に判断して回答することも可能であるが, 単純に他者が自分の言動を知ること, どのような情動状態になるのかを考えるだけでも行動調整は可能である。今回, 間接的な評判操作の検討で用いたイラストの評価課題は, 評判操作やお世辞の産出を検討する課題として用いられてはいるものの (Fu, & Lee, 2007; Chevallier, et al., 2012), その課題の構造は, 他者のためにつく嘘である *white lie* を検討する課題とオーバーラップしている。同様のイラスト評価を用いた課題において, 定型発達の小学生の *white lie* の産出を検討した研究がある (Warneken, & Orlins, 2015)。この研究では, 小学生はイラスト製作者の情動状態に応じて *white lie* の産出を調整しており, イラスト製作者が落ち込んでいる時には, 落ち込んでいない時に比べて, イラスト製作者の気分をよくするための *white lie*, つまりお世辞を言う傾向があることを報告している。したがって, 直接的な評判操作と間接的な評判操作では異なるスキルが求められていたことが本研究における結果の非対称性につながった可能性が高い。また, 今回の実験では, Warneken, & Orlins (2015)とは異なり, イラスト製作者の情動状態の操作は行わず, イラスト製作者役である実験者 B はニュートラルな情動状態で参加児とのやりとりを行っていた。結果として, お世辞の産出が報告されている定型発達児ではあまりお世辞が産出されなかった可能性がある。その一方で, 社会的な動機づけや共感性が高く, 他者の気持ちに非常に敏感な WS 児において, 特に特徴的な結果が得られたと考えられる。このことを踏まえると, WS 児が自分の評判を操作する意図があってお世辞の産出をしたかに関しては, 改めて検討を行う必要があるだろう。

以上より, TD 児・ASD 児・WS 児を対象に, 自己に関する直接的な評判操作と間接的な評判操作の有無を検討した本研究は, 直接的な評判操作に関しては心の理論の獲得が, 間接的な評判操作に関しては社会的動機づけが影響している可能性を示唆している。このことは, 評判操作の検討にあたっては, どのように評判を操作するのかによって, 分けて議論をすべきである可能性を示した。ただし, 今回の検討では, 心の理論の獲得と社会的動機づけが評判操作の有無に与える影響については, 直接的な検討を行っていない。特に誤信念の理解や社会的動機づけの高さに関しては, WS 児及び ASD 児

においても個人差があると考えられるため (e.g., Baron-Cohen, et al., 1985; Tager-Flusberg & Sullivan, 2000; Chevallier, et al., 2012), その関連を直接検討することは, 評判操作の発達メカニズムのさらなる解明につながると考えられる。

## 引用文献

- Asada, K., Tomiwa, K., Okada, M., & Itakura, S. (2010). Atypical verbal communication pattern according to others' attention in children with Williams syndrome. *Research in developmental disabilities, 31*(2), 452-457.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition, 21*, 37-46.
- Chevallier, C., Kohls, G., Troiani, V., Brodtkin, E. S., & Schultz, R. T. (2012). The social motivation theory of autism. *Trends in cognitive sciences, 16*(4), 231-239.
- Chevallier, C., Molesworth, C., & Happe, F. (2012). Diminished social motivation negatively impacts reputation management: autism spectrum disorders as a case in point. *PloS one, 7*: e31107.
- Engelmann, J.M., Herrmann, E., & Tomasello, M. (2012). Five-year olds, but not chimpanzees, attempt to manage their reputations. *PLoS ONE, 7*: e48433.
- Engelmann, J. M., Over, H., Herrmann, E., & Tomasello, M. (2013). Young children care more about their reputation with ingroup members and potential reciprocators. *Developmental Science, 16*(6), 952-958.
- Fu, G., & Lee, K. (2007). Social grooming in the kindergarten: The emergence of flattery behavior. *Developmental Science, 10*, 255-265.
- Fujii, T., Takagishi, H., Koizumi, M. & Okada, H. (2015). The effect of direct and indirect monitoring on generosity among preschoolers. *Scientific Reports, 5*: 9025.
- Izuma, K., Matsumoto, K., Camerer, C. F., & Adolphs, R. (2011). Insensitivity to social reputation in autism. *Proceedings of the National Academy of Sciences, 108*, 17302-17307.
- Karmiloff-Smith, A., D'souza, D., Dekker, T., Van Herwegen, J., Xu, F., Rodic, M., & Ansari, D. (2012). Genetic and environmental vulnerabilities: the importance of cross-syndrome comparisons. *Proceedings of the National Academy of Sciences, 109*, 17261-17265.
- 奥村優子, 池田彩夏, 小林哲生, 松田昌史, & 板倉昭二 (2016). 幼児は他者に見られていることを気にするのか: 良い評判と悪い評判に関する行動調整. *発達心理学研究, 27*, 201-211.
- Paterson, S. J., Girelli, L., Butterworth, B., & Karmiloff - Smith, A. (2006). Are numerical impairments syndrome specific? Evidence from Williams syndrome and Down's syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 47*(2), 190-204.
- R Core Team (2019). R: A language and environment for statistical

- computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.
- Riby, D. M., & Hancock, P. J. (2008). Viewing it differently: Social scene perception in Williams syndrome and autism. *Neuropsychologia*, *46*(11), 2855-2860.
- Tager-Flusberg, H., & Sullivan, K. (2000). A componential view of theory of mind: evidence from Williams syndrome. *Cognition*, *76*, 59-90.
- Tennie, C., Frith, U., & Frith, C. (2010). Reputation management in the age of the world-wide web. *Trends in Cognitive Sciences*, *14*, 482-488.
- 上野一彦・名越斉子・小貫悟 (2008) PVT-R 絵画語い発達検査 手引き. 日本文化科学社.
- Warneken, F., & Orlins, E. (2015). Children tell white lies to make others feel better. *British Journal of Developmental Psychology*, *33*(3), 259-270.

## 謝 辞

調査にご参加いただいたお子さん，保護者の皆さま，調査実施にご協力いただいた皆さまに，心より感謝申し上げます。